

111 学年度第一学期ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座  
「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」シリーズ講座 (8)  
テーマ：東アジアの仏教の変容からみる日本の仏教の特徴

中国文化大学 111 学年度ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座の第八回目は、本学日文系副教授の涂玉盞先生による「東アジアの仏教の変容からみる日本の仏教の特徴」であった。涂先生はまずアメリカのピュー・リサーチ・センターが発行する「Global Religious Landscape」と日本で毎年発行される「Yearbook of Religion」を紹介し、現在の日米の仏教信者の分布を紹介した。そして、仏教の伝播、日本の仏教と戒律、日本の浄土教の現世と来世という三つの側面から、東アジアの仏教の変容という観点に立脚し、日本の仏教の特徴を述べた。

### 仏教の東アジア伝播

仏教はインドに発祥し、全世界に伝播した。世界に広がった主なものは、南の上座部仏教、北の東アジアの仏教とチベット仏教である。その中で、中国に端を発し、韓国や日本に広がって東アジアで2000年間も維持された精神的な支柱と友好的な交流が東アジアの仏教とも呼ばれる大乘仏教を特徴とする中国語圏仏教を形成した。東アジアの仏教は、古典の漢訳に基づいており、一般に中国の智顛の「五時八教」の方法、すなわち、華嚴→阿含→方等→般若→法華涅槃の順で仏教經典の順序を並べ替えている。戒律に関しては、中国の僧侶は「法蔵部」の四分律に基づいて受戒すると同時に、大乘仏教の梵網戒を受容した。先生は、東アジアの仏教の源流である中国における經典や戒律の普及状況を簡単に紹介した後、日本における戒律の受容の特徴について説明した。

### 日本の仏教と戒律

戒律は仏教教団の生活上の公約とも言えるものであり、戒律がなければ組織を確立することは困難である。小乗戒は僧侶の日常生活を律するものであり、菩薩戒とも呼ばれる大乘戒は修行者が心を奮い立たせるための理想的な指標と言える。中国の鑑真(688-763)も日本で法蔵部の四分律を教えていた。しかし、日本では最澄(767-822)が、大乘仏教は大乘戒のみを採用すればよく、小乗戒は不要であると提唱して以来、日本では仏教の戒律が緩み、後世の僧侶が世俗生活を送るきっかけとなった。鎌倉時代には法然(1133-1212)が戒律を守っても破っても念仏さえすれば生まれ変わることができることを提唱した。そし

ていわゆる「造悪無礙」さえ、かつては社会現象にもなった。その弟子の親鸞(1173-1263)は、越後流罪により還俗を余儀なくされたのを機に、「非僧非俗」を提唱した。親鸞の妻帯生活は浄土真宗の特徴であり、明治以降は他の宗派にも広がり、日本の仏教の特徴の一つとなった。

## 日本の浄土教の現在と未来

日本の仏教は、しばしば葬礼仏教(葬式仏教)と呼ばれる。確かに、正統な仏の理論では、日本の葬礼仏教における死者の儀礼を十分に説明することはできない。では、死後、浄土での往生の理論はどのように説かれるのだろうか？浄土教文献での理論と実践の体系では現世で三昧を得ることが重視され、民衆の振興では来世での往生の可能性が重視されている。では、この世で三昧を得ることと、来世で浄土に生まれ変わることはどのような関係にあるのだろうか。

『般舟三昧経』は現存する浄土経典の中で最も早く叙述された現世で阿弥陀仏を見るための三昧の経典である。このような「般舟三昧」の観仏思想の展開は中央アジアにおける観仏修行法を形成したものであり、その中でも『観無量寿経』(以下『観経』という)には阿弥陀仏を対象とした観仏法で最も普及したものが記されている。且つ『観経』は現世の観仏修行と来世の往生とを巧みに組み合わせたものである。

隋の慧遠、智顛は『観経』を「理観」と解釈し、理観の方向は我々の心中に内在するものを理解することで見る阿弥陀仏と浄土である。それに対して、唐の善導(613-681)は浄土を心の外の再訪に存在すると看做し、具体的に本来の阿弥陀仏、及び、その浄土の姿を捉えようとした。善導の解釈は分かりやすく、実践しやすかったために民衆の間で爆発的な人気を博して普及した。だが、その影響が続いたのは一時的なものであり、すぐに理観の修法がまた復活した。後の中国仏教でも禅浄一致が主流であり、禅観を修行するのと同時に念仏も行い、来世に浄土へ生まれ変わることを希望するという複合形態を形成した。

日本では理性観仏が法然以後明らかに減弱した。法然は「偏依善導」を唱え、さらに念仏以外の修行を、すべては雑行であり、一切を捨て去ることを主張した。これ以後、法然は現世で観仏する悟りを否定し、ひたすら来世への往生に集中し、したがって全く新しい次元を構成した。また、法然の弟子の親鸞は更に「平生往生」を唱え、凡夫の往生のための修行を認め、阿弥陀仏が我々を助けることを主張した。凡夫が阿弥陀仏を信じるなら念仏して報恩する。親鸞の念仏観は念仏を修行法として悟りを求める歩みから贖いの歩みへ進んだ。

近代に入って、来世思想は急速に衰退した。科学で証明できない来世は前近

代の迷信とされ、仏教の頑迷と判断は揶揄の対象となり、その傾向はますます強まっている。日本の仏教界は、仏教が本来は現世の悟りを求めるものであると認め、来世論は便宜的な手段にすぎないと考えているようである。そのような主張に対して、先生は来世を再発見し、現世と来世を関係付ける新しい思想を確立する必要があると確信することを述べた。

（[網頁連結](https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php)：<https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>）

（[撰稿](#)：齋藤正志　　日文系・教授）